

紀州隅田大高能寺藏大般若經について

— 東福寺正統庵版の書誌學的研究 —

橘 恭 堂

一

わが國における大般若經信仰の實態を究明するためには文献資料と傳承資料によらねばならないが、それらと共に各地の諸社寺や一般の好事家等に所藏されている大般若經の卷冊即ち遺物資料も、それに記されている刊記・識語・奥書など信仰のありのまゝの姿をとゞめているのであるから、信仰の實態を究明するための有力な資料であり、これの調査を等閑視することはできない。ところが、遺物資料としての大般若經の内、書寫經については早くより注目されて、所藏の場所や識語・奥書などが調査・報告されているのであるが、それに比較して摺寫經についての研究ないし板木の所在についての調査報告は極めて少ないと云わねばならない。このような摺

寫經の書誌學的研究の少ない理由は識語・刊記などが印刷による劃一的なものであることから、書寫經のそれに比較して單調であり、従つて調査それ自體の興味が薄いと考えられるし、書寫經は書寫年代が奈良・平安朝時代にまでさかのぼれる可能性があるのに反して、摺寫經はせいぜい鎌倉時代までさかのぼれるだけであると云う考え方によるのではなからうか。また、中世から近世に至るまでに、同一板木で摺寫されたものが多數現存することも事實で、それらをいくら比較検討してみても何時、誰が、どのような目的で開板したかと云うようなことが明らかにすることは少なく、唯その識語・奥書などによつて經卷の流傳のあとを尋ね得ることがせい一杯である。また、南北朝から室町時代に至る間に開板された春日版や、近世に開板された天海版・傳道院版（以上木

活) 東叡山版・黄檗版・大覺寺版などや、所謂町版などの板木の全部ないし一部分の所在は明らかであるが、嘉祿版・智感版・尊氏版・康曆版並びに私の稱する東福寺正統庵版など中世に開板された大般若經の板木の所在は全く不明である。

これらの板木の所在については暫らくおくとして、版經六百卷の一卷々々についての精密な調査報告は極く最近に「金澤文庫研究」に貫遠人氏が「圓覺寺藏大般若經の刊記等について」と題して卷を逐つて紹介されたものを除いては、私の紹介する大高能寺藏經と同一板木で摺寫されたと思われる大般若經について、清野謙次博士と田岡香逸氏が刊記を整理した形で紹介されたものの他寡聞にして知らない。まして版の異なると考えられているものを六百卷に亘つて比較検討してみると云うような勞が敢てとられた例はないようである。私がこゝに大高能寺藏大般若經の刊記を煩をいとわず逐卷的に紹介する理由は、經典信仰資料としての詳しい検討を後日行ないたいが、それはともかく、從來全くの異版とされている康曆版との比較對照を行ないたいことと、大高能寺藏經をはじめとする一群のものを、東福寺正統庵版と稱してもよいのではないかと考えるので、その板木の所在の不明な現状にあつては、それに代るものとして刊記等が重要

な資料と目されるからである。尤も、先に述べたように清野博士は京都市左京區花背八桝町洞泉寺所藏のもの(昭和十九年燒失)を紹介されたがその中には誤記が認められるし、田岡氏は兵庫縣加東郡社町朝光寺所藏のものを紹介されたが、その中には欠卷があつて、共に東福寺正統庵版と稱するためのテキストとしては不完全であり、加うるにそのいずれも刊記が整理した形で示されているので、かえつて異版との比較對照には不便であることは否めない。

二

大高能寺は紀州橋本市隅田町垂井にあり、國鐵和歌山線隅田驛から北西約一キロの地に位置する眞言宗の寺院であるが、この寺の向つて右隣には國寶の人物面像銅鏡の所藏されていることで有名な隅田八幡宮があり、高野山文書によれば、隅田八幡宮の祭祀には隅田一族が宮座をなしていたことも知られる。私は、この隅田八幡宮の神宮寺であつた大高能寺に所藏されている大般若經を昨昭和三十七年五月三日に調査する機會を得たのでその結果を紹介したい。

この經は第六百卷を欠くのみで餘の五百九十九卷が虫害も餘りみられず良く保存され、本堂須彌壇下に安置されている。裝潢は折本仕立であるが卷子本からいつの時

代かに改装されたい。たゞ折り目が痛んだ結果裏打ちしてある箇所がまゝ見受けられる點が注意される。表紙は薄手で薄茶色である。經文は半面五行、一行十七字詰で、初巻を例にとると縦二六・五センチ、横九・七センチ、行高二〇センチ、天アキ二・七センチ、地アキ三・八センチ、一巻の總長は約九メートルである。五冊を上に乗ねて横に二列に並べて計十冊を一つの小箱に入れ、小箱五個を上に乗ねて横に二列に並べて計十箱が一つの大箱に入れられている。この大箱が計六個あるわけであるが、各大箱の外側四面に隅田、八幡宮、庄中、何佰と分けて書かれているから以前には八幡宮の什物であつたことと、先に述べた隅田一族によつてこの大般若經が信仰されていたであろうことが推定される。この大箱はそれぞれ太い紐でくゞられ、吊つて持ち歩きできるようになつている。この經は傳承によれば、以前には部落内を廻村轉讀したと云われている。

大高能寺藏經五百九十九卷の全卷には卷頭や卷末に、
 長州福函山 明德辛未秋
 万壽寺公用 釋寂圓印舎
 と陰刻した朱印が捺されているから長州萬壽寺に藏されていたものが何時の時代にか大高能寺へ轉藏されたこと、開板から十數年を経た明德二年の秋以前に摺寫されたものであることが明らかである。また後に記す刊記集によつて、廣汎な地域に亘つて

永清以下の勸進僧が活躍して、多くの知識の合力によつて開板が完成したことが明らかである。又卷頭や卷末に、天・地・黄・荒などの文字がみられるものもあるが、これは千字文で十巻毎に分けられていたことを示すものである。即ち初巻から第十巻までが天であり、第一一巻から第二〇巻までが地であり、第二〇巻から第三〇巻までが玄と云うが如きである。

三

ところで、既に貫達人氏が指摘されているように、⁽⁴⁾圓覺寺その他に所藏されている大般若經は南北朝時代に勸進僧智感等が關東一圓を勸進して開板した謂ば關東版とも稱すべきものであるが、大高能寺に所藏されている大般若經は、その卷三〇七の刊記に

洛之慧峯正統庵置大般若印板四百内焉比丘永清發誠心而化有力命工續造矣宣哉印文打就衆人模寫以茲功勳普利息有者也昔應安甲寅仲秋日

幹縁比丘永清造之とあるように、智感版と同時代の南北朝に勸進僧永清が主幹となつて關西地方を中心に廣く勸進した關西版とも稱すべきものである。この印板が慧峯の正統庵に置かれたのである。洛之慧峯が京都東山の東福寺を指すらしく、東福寺誌所收の性海靈見の天龍寺入寺自贊に⁽⁵⁾

十年行脚江南地萬里歸來鯨海東
 老矣欲休々不得惠峯住了又龜峯

康曆己未孟秋日
 天龍老衲性海叟

とあるように、東福寺住持の性海靈見は康曆元年に天龍寺の請を容れて同寺に入寺したのであつて、惠(慧)峯(東福寺)といひ龜峯(天龍寺)と詠じていることから明らかである。

また南北朝時代に正統庵の存在したことは、和漢禪釋次第に

正統庵

月船和上、諱深海、謚法照禪師、
 應長元六月廿六日寂、云々

とあつて、應長元年に月船が正統庵で示寂しているし、

東福寺誌に収録されている正統下、南海和尚傳には

師諱寶州、號南海……五十四住東福、後歸作之理濟

養痾、入滅六十有二也、實至德元年癸亥十一月廿日

也、塔正統庵

とあるように、正統庵住持の南海和尚が至德元年に示寂し、正統庵に塔されているから正統庵は現存しないが南北朝時代には存在していたことが明瞭である。

さきあげた卷三〇七の刊記にみえる「四百之内」と云うことは、全六百巻の内合せて四百巻を指すのか、普通には卷三〇一から四〇〇までを四百の内と云うのでこの百巻を指すのか、或いは卷三〇一から四〇〇までの内の卷三〇七唯一巻を指すのか明瞭でないが、卷三〇七

のみを正統庵においたというのは何のための幹縁。比丘であるかわからないし、餘りにも仰々し過ぎる刊記であると思われる。卷四九九の刊記に

伏願開此卷功勳回向無上菩提開明心地永成般若智林佛種不斷法燈不絕治隆三寶上報四恩下資三有法界同圓種智耳

南瞻部州大日本國州錦織村光禪庵住持比丘至脫

永和歲在丙辰十月十七日謹誌

とあるから、應安甲寅(七年)に六百巻全部の開板が完了していたと考えることはできないけれども、大高能寺藏經には明德辛未(二年)の朱印が捺されているし、朝光寺藏經にも明德年間の奥書があるから、それ以前に六百巻全部の開板が完成していたとしなければならぬ。而して後に紹介する刊記集によつて六百巻の内、多少出入はあるけれども卷三百から四百臺の開板結縁者が最もバラエティーに富んでいることから、この部分が應安七年から永和丙辰(二年)の間に開板されて正統庵に置かれ、これと相前後して余の四百巻が安置せられたと考えるのが最も妥當してあるであろう。それ故この板木によつて摺寫したと考えられる一群の大般若經を東福寺正統庵版と稱することとしたい。しかし、今後の問題として、この大般若經の板木の所在の探索と開板に關するよ

り有力な資料の發見が殘されてる。

四

さて、つぎに東福寺正統庵版大般若經の刊記と、印刷史の上では、從來全く新しい板木をもつて摺寫されたと考えられている康曆版の刊記とを比較對照してみることとしたい。木宮氏は日本古印刷文化史で

此經板喜捨施入江州佐々木新八幡宮專爲上酬四恩下資三有無邊法界廣大流通者

康曆己未八月七日 幹緣比丘勝源

願主當國大守菩薩戒弟子 崇永

とあることから、康曆元年に新しく六百卷の板木を開板し佐々木新八幡宮に喜捨施入したとされているのであるが、同書に示されている他の卷の刊記の内、

卷三五一の沙彌照禪

卷三五三の尾張守源義清

卷三五五の右衛門尉源則光

卷三六六の源康春

などは、東福寺正統庵版（後記の刊記集を参照）と同一の刊記である。更に滋賀縣史第二卷所收として日本古刊書目に収録している卷六百の刊記には

此經板喜捨施入

江州蒲生豐浦新宮大社爲上酬四恩下資三有無邊法界大

流通者

康曆元年己未八月七日

幹緣比丘勝源

願主 當國大守菩薩戒弟子 崇永

とあり、施入された社名は異なるけれども同様に「此經板喜捨施入云々」とあることからすれば、板木が施入されたように思えるが、同一日に同一經を二部も開板することは考えられないから、板木の喜捨施入ではなく、摺寫された大般若經六百卷を二社にそれぞれ一部ずつ喜捨施入したとしなければならない。

このような點から、欠損した一部分を新しく補刻したこともあつたかはしれないが、康曆板もやはり舊鑱版をもつて摺寫されたものとすべく、その經卷の施入を發願したのが佐々木氏頼であり、摺寫賃を勸進したのが勝源であるとするのが妥當であり、木宮氏の云われるような六百卷全部の板木が新しく雕造されたものではない、と斷定せざるを得ない。そのみならず、東福寺正統庵版大般若經の一部であることを是認しなければならぬのである。私は康曆版と稱されるものを未だ調査する機會を得ないので、唯、デスク・ワースによつて右に擧げた數卷が刊記から同一版であることを指摘するに止まるけれども六百卷全部に亘つて印文と刊記を比較對照

するならば、更に多くの同一版を發見し得る可能性は充分にある。この康曆版と稱されるものは久原文庫（現在大東急記念文庫に納められている）及び江州樹下神社に所藏されているようであるが、この他にも未だ現存するとも考えられるので、若し所藏者などを御存知の方があれば御示教を得たいものである。

五

以上で大高能寺藏大般若經に對して東福寺正統庵版と稱するための考察および康曆版と正統庵版との比較を了えたのであるが、次のような點に一言ふれておきたい。

即ち、智感版と稱されるものも、私の稱する東福寺正統庵版も、正統庵版の一と推定される康曆版も、一般庶民を勸進して開板し、摺寫したものである。このような勸進が成功するかげには勸進僧の並々ならぬ努力があつたことを否定はしないが、それ以上に注目しなければならぬ點は庶民信仰と大般若經が固く結合していたと云うことである。即ち、古代には法華經、金光明經・仁王經などの護國經典に次いで、大般若經が國家的災害を避けるために屢々讀誦されており、弘仁、貞觀時代以降は般若系經典がさながら神祇法樂のために神前讀經される經典であるかのように度々讀誦されているのであるが、中世に至つて直接的に庶民信仰と結合することとなつ

た。その最もよい例は、村落共同體の共同祈願の一つである雨乞に大般若經が屢々轉讀されたり、或は頓寫されたりしていることである。その他に鎌倉時代から南北朝時代を通じて庶民の生活が向上し、彼等が鄉村制を確立して自治組織の紐帶として盛んに有力神社を勸請し、その神前において神祇法樂のために大般若經を轉讀したのである。これは古代において神祇法樂のために神前讀經される經典と考えられていたからであり、同時に古代における護國的觀念が中世的に變化して村落共同體を鎮護すると云うような觀念に展開したと考えられるのである。このような理由から盛んに轉讀される大般若經の需要は尨大な部數に上つたであらう。大般若經開板の勸進がこの需要を充足するために行なわれたのであつて、一般庶民の間に強い要請があつたと云う點にこそ勸進の成功した理由が求められねばならないと思う。東福寺正統庵版を一部含む康曆版と稱される大般若經が佐々木新八幡宮や豊浦新宮大社へ喜捨施入された例は、この間の事情を如實に示している好資料と云わねばならない。

(1) 註

貫達人氏 圓覺寺藏大般若經の刊記等について（金澤文庫研究 通卷七五號〜八四號）

(2) 清野謙次氏 大般若經の研究（寶雲第一九冊）

- 田岡香逸氏 朝光寺藏版本大般若經について(史迹と美術第三一輯の三)
- (3) 高野山文書第十卷高野領内文書(二) 参照
- (4) 貫達人氏 前掲論文(金澤文庫研究通巻七五號) 参照
- (5) 東福寺誌 五四九頁参照
- (6) 續群書類從(同書刊行會本) 第廿八輯上参照
- (7) 東福寺誌 四七四~五頁参照
- (8) 田岡香逸氏 前掲論文参照
- (9) 木宮泰彥氏 日本古印刷文化史 二九〇~一頁参照
- (10) 同右 二九二頁参照
- (11) 吉澤義則氏 日本古刊書目 一九八頁参照
- (12) 木宮泰彥氏 前掲著書 二九〇および二九六頁註3参照
- (13) 堀一郎氏 上代日本佛教文化史④ 一八五~一九二頁参照
- (14) 辻善之助氏 日本佛教史の研究正篇④および三四~六頁参照
- (15) 森末義彰氏 奈良における祈雨祈禱とその本尊圖繪の問題(寶雲第十九册) 参照

大高能寺藏大般若經 刊記集

(凡例)

- 一、刊記集にある算用數字はすべて大般若經の卷數を示す。
- 一、特に註記してない限り卷末刊記である。
- 一、刊記の下の括弧内の算用數字は参照すべき卷數を示す。
- アンダーラインのある卷數はその卷數のもとに詳しい参照卷數が示されていることを意味する。
- 一、同一刊記が前後に連絡している場合はその最初と最後の卷數を刊記の上に冠し、その間を「~」でつないで省略す

- るか若しくは二つ以上の卷數を冠した。刊記の下に付した括弧内の數字もこれに準ずる。數字は常に横に左から右へ展開している
- 1 天 (巻初)
- 2 天 (巻初)
- 3 天
- 8 天
- 10 天 (巻初)
- 11 地 (巻初)
- 12 地 (巻初)
- 18 地 (巻初)
- 21 開板願主教念
- 22 開板願主遷慶
- 23 元光
- 24 開板願主源重
- 26 開板願主道賀妙觀
- 32 黄 (巻初)
- 35 黄 (巻初、卷末共)
- 36 黄 (巻初)
- 40 黄 (巻初)
- 45 (巻初三行目上から十四字目の「願」字を「預」字に墨筆にて訂正)
- 46 廬山寺開板
- 49 菅野信眞開板
- 72 荒 (巻初、卷末共)
- 102 爲西念往生佛土也世思女

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|---|------------------------------------|--|---|--|------|---------|----------------------|-------------|--------|--|------|------|----------------------|---------------|-----|
| 334 | 333 | 315 | 313 | 307 | 254 | 215 | 201 | 163 | 153 | 152 | 127 | 121 | | | | |
| 比丘持法 | 正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣
(464
476
516
521
525
527
530) | 成世正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣
(385
387) | 沙彌永誕
見月禪尼
沙彌道安
見性善女
(352
395
447
597) | 洛之懸峯正統庵置大般若印版四百内焉比丘永清發誠心而化有力命工續造矣宜哉印文打就衆人模寫以茲功勳普利息有者也、
昔應安甲寅仲秋日 幹縁比丘永清造之 | 願主宗印
(275の卷末經題の卷數274を275に、277の卷數も277に改竄さる。285の經末に「尤願」の二字加筆あり) | 願主宗印 | 願主宗印 | 開孫二郎 | 開板蓮乘 | 開板三郎二郎 | 開板明心 | 開板若願 | | | | |
| 414 | 411 | 395 | 385 | 380 | 366 | 361 | 358 | 355 | 354 | 353 | 352 | 351 | 348 | 344 | 339 | 335 |
| 越前權守經遠 | 石清水八幡宮若宮經所 | 沙彌道安
(313
352
597) | 成世正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣
(315
333) | 照山源光 | 源康春 | 明功禪尼 | 左衛門尉平忠顯 | 左衛門尉源則光(の下に「書之」二字加筆) | 明性
(339) | 尾張守義清 | 沙彌永誕
見月
沙彌道安
(313
395
447
597) | 沙彌照禪 | 法智禪尼 | 一乘院(の下に「宮書之」の三字加筆あり) | 明性禪尼
(354) | 尼了善 |

- 479 光殿
- 477 伊勢因幡守入道心光
- 476 正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣 (315・333)
- 473 法智禪尼 (548・584)
- 471 美作國埴和築前權守爲次
- 470 天梁道溪
- 468 明壽禪尼 □ 那 厶
- 467 小瀬十郎左衛門入道法名沙彌源清橋朝臣信治 (448)
- 464 正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣 (315・333)
- 452 阿闍梨實尊 (497・504・523・553・554・559・561)
- 451 長雅樂大夫信俊 (560)
- 450 和田大演沙彌道弘 (489・518・524)
- 449 赤松出羽守源朝臣顯則 (440)
- 448 小瀬十郎左衛門入道法名沙彌源清橋朝臣信治 (467)
- 447 見月 (313・352)
- 440 赤松出羽守源朝臣顯則 (449)
- 419 沙彌祖妙 (487)

- 481 即空正心禪尼
- 482 正阿
- 483 兼阿
- 485 三河國星野刑部少輔高範
- 486 源氏久
- 487 爲二親祖妙 (419)
- 489 三河國和田大演修理亮入道沙彌道弘息女 加喜子 (450・518・524)
- 497 願主實尊 (452・501・502・503・505・506・508・510・532・537・539・540・558・562・570)
- 499 伏願開此卷功勳回向無上菩提開明心地永成般若智林佛種不斷
法燈不絕治隆三寶上報四恩下資三有法界證同圓種智耳
南瞻部州大日本國作州錦織村光禪庵住持比丘至脫
永和歲在丙辰十月十七日誌
- 501・503 願主實尊 (452・497)
- 504 阿闍梨實尊 (452・497)
- 505・506・508・510 願主實尊 (452・497)
- 514 沙彌本月庵主
- 516 正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣 (315・333)
- 518 和田大演修理亮入道沙彌道弘 (450・489・524)

578	562 570	561	560	559	558	553 554	548	539 540	538	532 537	527 528 530	526	525	524	523	521
宗金禪尼	願主實尊 (452・497)	阿闍梨實尊 (452・497)	長雅樂大夫信俊 (451)	阿闍梨實尊 (452・497)	願主實尊 (452・497)	阿闍梨實尊 (452・497)	法智禪尼 (473・584)	願主實尊 (452・497)	願主	願主實尊 (452・497)	正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣 (315・333)	藥科新左衛門入郎良清	正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣 (315・333)	和田大濱修理亮入道沙彌道弘 (450・489・518)	阿闍梨實尊 (452・497)	正四位下行左京大夫大中臣朝臣行廣 (315・333)

584 法智禪尼 (473・548)

594 沙彌道惠

595 沙彌持宗

597 沙彌道安 (313・352・395)

599 沙彌明善

600 近江守國經 (洞泉寺本によつて補す)

付記

一、大高能寺所藏の大般若經について、

長州福永山萬壽寺は現在の山口縣阿武郡阿武町奈古萬壽寺であろうと想定して、該寺へそれを證する記録の有無の紹介を乞うたが未回答である。

二、大高能寺藏經の該寺への傳來の經緯について

高野山文書第十卷所收の隅田八幡宮緣起(天明五年に大高能寺翁胤誌す)のなかに、この大般若經に関する記事あり。したがつて、天明五年以前に該寺に傳來していたことはほば疑いない。またその緣起によると、大和般若寺より傳來したとのことであるが、この點未だ確認していない。(同書五十五頁參照)

三、康曆版大般若經について

滋賀縣滋賀郡滋賀町南比良区長および蒲生郡安土町下豊浦新宮大社に該經の在否を問うたが未だその回答に接し得ない。

なお、東福寺正統庵に關しては本學教授福島俊翁先生に、近世における町版の大般若經に關しては基中堂主人三浦良吉氏にそれぞれ御示教を受けた。末筆ながら記して謝意を表する次第である。